

東坡「黃州寒食詩卷」と宋代士大夫

近藤 一成

はじめに

「書とは何かと問われれば、この書を黙つてさし出せばよい」と石川九楊氏をして言わしめた蘇軾「黃州寒食詩卷」は、由来、歴代鑑賞者の賛嘆の辞をほしいままでにしてきた。⁽¹⁾現存詩卷の題籤者である清末の人梁鼎芬（節菴）、題字の揮毫者乾隆帝をはじめ、この詩卷に題跋を認めてきた諸家はいうまでもなく、近年の中國書道史関係の書物において東坡書蹟中の神品第一とする解説は定着しているが、それにもましてこれを「書の中の書、書中の龍（王）」とまで激賞すること石川氏の評価は際立つ。⁽²⁾しかも従来、この書が何ゆえ神品第一なのかについては印象批評以外、殆ど何の説明のなされることがなかった中で、氏は「黃州寒食詩卷は、完全な三折法段階に移行を果たした段階で、二折法の書の歴史をもう一度総括している。その点が新三折法への転生を果たした黃庭堅とは異なりある種のわかりにくさを孕んでいる理由であり、また古法三折法を見据えている点で書の規模は途方もなく深大」と述べ、各書字の詳細な分析をふ

まえそれらが王羲之（二折法）と顏真卿（三折法）を統合した空前絶後の書であることを明らかにする。そしてその孤絶し屹立する姿に「書の中の書」である理由を求めた。これは「筆蝕」という氏独自の概念を中核に、書道史ではなく書史として中國の書の歴史を体系化した独特の観点からの位置づけであり、その体系を受容するか否かは別として、氏の文脈に沿う限り甚だ説得力ある説明といえよう。⁽³⁾

言うまでもなくこの詩卷の価値は、続く黃庭堅（山谷）の書（跋文）の存在によって倍加された。のみならず山谷の跋文は「この東坡の詩は李白も及ばぬところがあり、書は顏魯公、楊少師、李西臺の筆意を兼ね、東坡も二度とこのような書は書けないであろう」と記すことにより、後世の評価の方向を決定付けた。⁽⁴⁾この詩卷に記された題跋の類を記載の順に挙げれば、東坡の詩と山谷の跋文の間に乾隆帝の小字行書乾隆十三年（一七四八）の題記があり、山谷の後

に明董其昌の行書題跋、南宋張續の楷書題跋、近人王世杰の民國四十八年（一九五九）行書題跋、内藤虎次郎大正十三年（一九二四）

楷書題跋、顔韵伯の民国七年（一九一八）行書題跋、羅振玉甲子（一九二四）行書題跋と続く。これら錚々たる歴代鑑賞者の豪華絢爛ともいえる跋文が、この詩巻の価値を一層高めていることは疑いない。

諸題跋のなかでとくに顔跋は、詩巻が乾隆年間に清朝内府に入ったのち、英仏軍の円明園焼き討ちにより巷間に流出した以降の流転に詳しく、内藤湖南の跋はそれを含め、歴代の著録と先行題跋を考証することにより、黄庭堅題跋以後の詩巻の歴史を簡潔にまとめている。典雅な文章と智永を学んだというその王羲之流の書は、これから題跋中で群を抜く。半年余り自らの書齋に置き日夜親しく賞玩、秘蔵の乾隆御墨を磨し、心太平室の純狼毫を用いて書き上げたという跋文からは湖南の感激ぶりが立ち上ってくるようである。また羅振玉跋は、光緒二十八年（一九〇二）湖広総督として武昌に在った張之洞のもとに、その蘇軾癖を知る当時の詩巻所蔵者が高価での買い取りを期待して来訪した折の逸話を記したもので、張之洞頭彰の文意にもかかわらず客と書の売買をめぐり虚虚实実の駆け引きを展開する之洞の姿が興味深い。小論は、この「書の中の書」に黄跋が加えられ、北宋を代表する二家の書が妍を争う至宝が誕生して伝世するに至るまでの経緯を主に考察し、そこに宋代固有の時代状況がそれを可能にしたことを読み取ろうとするものである。先ず湖南の跋を摘録して、問題のありかを示したい。

一 湖南題跋をめぐる

内藤湖南は、乾隆帝の巻首題字「雪堂余韻」の四字が倣澄心堂紙の致佳なるものに書かれている指摘から始め、東坡の詩、山谷の跋双方に刊記署名のないこと、山谷跋後に董其昌（玄宰）の跋があることをいう。次に張丑（青父）の「清河書畫舫」の語を紹介、および卞永譽（令之）「式古堂書畫彙考」にも著録のあることを述べ、阮元（芸臺）の「石渠隨筆」をやや詳しく引用して山谷の跋が書かれた事情の解説の代わりとする。その上で、詩巻中の「埋輪之後」印を、張氏のものと考え。これは次節で詳しくみるが、山谷跋の誕生にかかわった張氏は漢の張良の子孫を称しており、「埋輪」が張良の裔である後漢の張綱の故事に因むことからの指摘であろう。⁽⁵⁾ 続いて巻中の印記に触れ「天曆之寶」や孫退谷、納蘭容若諸人の印により乾隆以前の来歴が知られるとする。とくに説明はないが「天曆之寶」は元の文宗天順帝（年号天曆）のもの、孫退谷（承澤、一五九三―一六七六）は「北平孫氏」、納蘭容若（性徳、一六五五―一六八五）は「成徳」「容若書畫」「楞伽」などの印からの推定と思われる。^(補注) さらに乾隆以降の流伝は顔跋に明らかであるとし、その顔韵伯が大正壬戌（十一年、一九二二）に來日、東京で菊池惺堂に重価で譲ったことを明らかにする。翌大正十二年九月の関東大震災で東京は十の六、七が焼け、菊池氏の先代からの蒐集品も灰燼に帰したが、氏

は身を賭して李龍眠「瀟湘卷」とこの詩卷を持ち出し救ったことを述べ、その行為を称えている。この菊池氏が上洛、湖南に跋文を依頼し、半年余り手元に置いた後、大正十三年四月に以上の文を記したとする。さらに追記があり、嘗て丁巳（大正六年一九一七）の年に北京の書画展覽会でみたことをいう。

湖南が引く阮元『石渠隨筆』二の関連箇所には次のようにある。

蘇軾黃州寒食詩墨蹟卷、後に黃魯直跋有り。世の鴻寶為り。顧るに戲鴻の刻する所は、蘇詩黃跋に止まる。其の後の張續一跋は、人、未だ之れを見ず。其の跋に云う（中略）。彭大司空云う、續跋に謂う所の曾大父禮院は乃ち張公裕なり。曾て祕閣校理に官たり。其の子浩は即ち謂う所の永安、庭堅が為に仁宗皇帝御書の記を作る者なり。廬山府君は、乃ち公裕の弟公邵なり。通直郎に官し廬山県に知たり。張氏は世々蜀州江原の人為り。留侯の裔より出づと云う。故に三晋を以て署望するなり、と。

一、二の文字の出入りはあるが、これが『湖南文存』七（『全集』一四所収）に収載する蘇東坡黃州寒食詩卷跋の引用部分である。阮元が引く彭大司空とは、明清時代に大司空が工部尚書の別称であったことを考えると、南昌の人で乾隆二十二年の進士、翰林院南書房の上司にあたる彭元瑞（一七三一—一八〇三 字掌仍、号芸楣）がその人であろう。実は、詩卷に書かれた跋の原文には傍線部が欠落しており、これであると曾大父禮院が張公裕、永安がその子の浩であることが分かりにくくなる。⁽⁶⁾ いずれにしても上記引用で中略した

張續の跋が、山谷跋の事情を知る手掛かりであるので、以下全文を原跋から引く。

東坡老仙の三詩は、先世の舊と藏する所なり。伯祖永安大夫、嘗て山谷に眉の青神に謁せしとき行書の帖を携うる有り。山谷、皆な其の後に跋す。此の詩は其の一なり。老仙、文高く筆妙にして、桀として霄漢雲霞の麗しきが若し。山谷又た之れを發楊蹈厲す。絶代の珎と為すべし。昔、曾大父禮院、中秘書に官たりしとき、李常公擇と僚為り。山谷の母夫人は公擇の女弟なり。山谷、永安に帖を与えて自ら言う、先禮院を公擇舅の坐上に識る、と。是れ由り永安と游好す。先禮院所藏の昭陵御飛白記及び曾叔祖廬山府君志名（銘）、皆な山谷集に列する有り。惟だ諸跋は世に盡くは見えず。此の跋尤も恢奇。因りて詳らかに卷後に著す。永安は河南の属邑為り。伯祖嘗て之れが宰為り、と云う。三晋の張續季長甫懿文堂書す。

（東坡老仙三詩、先世舊所藏。伯祖永安大夫、嘗謁山谷於眉之青神、有携行書帖。山谷皆跋其後。此詩其一也。老仙文高筆妙、桀若霄漢雲霞之麗。山谷又發楊蹈厲之。可為絶代之珎矣。昔曾大父禮院、官中秘書、与李常公擇為僚。山谷母夫人公擇女弟也。山谷与永安帖自言、識先禮院於公擇舅坐上。由是与永安游好。有先禮院所藏昭陵御飛白記及曾叔祖廬山府君志名、皆列山谷集。惟諸跋世不盡見。此跋尤恢奇。因詳著卷後。永安為河南属邑。伯祖嘗為之宰云。三晋張續季長甫懿文堂書）

先の彭元瑞の言によれば、張縝の曾大父（曾祖父）禮院は張公裕であり、秘閣校理にあったとき李常と同僚であった。また河南の永安県知事であったことから永安大夫とよばれる伯祖（大伯父）とはその子の浩、さらに曾叔祖廬山府君は公裕の弟張公邵となる。縝跋は、黃庭堅の母が李常の妹であったため、庭堅は李常を介して張公裕を知ったといい、庭堅が眉州青神県を訪れたとき、浩はその縁で公裕所蔵の東坡三詩を携えて面会し跋文を依頼したという。庭堅は、このほか同じく公裕所蔵の仁宗の飛白に記を、また公邵の墓誌銘を書いており、いずれも『山谷集』にみえると述べる。確かに前者は仁宗皇帝御書記として乾道年間刊『豫章黃先生文集』一六（四部叢刊初集）に収録され、後者の通直郎張修孺墓誌銘は『別集』一〇（後述）にあるが、ここで少し厄介な問題が起こる。それは張縝がいう『山谷集』とは何を指しているのかという問題である。というのは同じ『別集』には、この山谷「寒食詩跋」をも収録しており、縝の、「飛白記」と「墓誌銘」は『山谷集』にあるが、三詩の庭堅跋文が未録なのでこの跋を記したという記述と矛盾するからである。もっとも「未だ盡くは見えず」との部分否定の言いかたからいえば三詩の跋すべてが見えないわけではないにしても、この跋がとりわけ「恢奇」であるから記したという以上、縝跋が書かれた時点で『山谷集』に収録されていなかったと考えざるを得ない。では現行『別集』が両者を収めることをどのように説明すればよいのであろうか。

ここで小論が使用する劉琳氏等編『黃庭堅全集』（四川大學出版

社二〇〇一。以下『全集』と略称）に触れ、上記の問題を考えた。『全集』本文は正集三二卷、外集二四卷、別集一九卷、統集一〇卷、補遺一一卷からなり、付録として伝記、年譜、歷代序跋を始め人名索引まで付し、黃庭堅の著作集として現在もつとも完備した内容をもつ。本文についていえば、底本とした光緒二十年義寧州署刻本『宋黃文節公全集』（別称『山谷全書』）は、乾隆二十七年刊『宋黃文節公全集』（緝香堂本）に統集一〇卷を増補した重刻本で、近刊『全集』は『山谷全書』にさらに佚文を蒐集した補遺一一卷を加えることにより、山谷の詩文を今日可能な限り網羅した決定版の全集となった。黃庭堅の著作は、詩や書簡、題跋の単刻を含めると、宋以降かなりの数の刊行がなされているが、著作集ということになれば正集、外集、別集それぞれの編纂と刊刻を問題とすればよく、現在、それらの系統関係はほぼ明らかである。『全集』の前言によると、正集の編纂は南宋の高宗建炎二年、胡直孺が発議し、後に庭堅の甥洪炎らによって刊行された三四卷がその始めて、四部叢刊初集三〇卷はこの乾道年間の刊本という。またやはり高宗朝に、正集出版を補佐した李常の子の李彤は収録されなかった詩文を集め、外集一四卷を刊行した。さらに孝宗淳熙九年に山谷の族孫黃偕は、正集、外集にも未収の詩文を集めて別集一九卷として出版した。以降には、これら三集に慶元五年同じく黃偕編『山谷先生年譜』三〇卷や山谷の父黃庶の文集『伐檀集』二卷を加える形で、明弘治十六年開雕嘉靖六年刊の『山谷全書』があり、萬曆三十二年の『重刻黃文節山谷先生文集』、

先述の清乾隆二十七年刊『宋黄文節公全集』と続く。

『全集』前言は、張公邵墓誌銘と寒食詩跋の両者を収める『別集』について、当初一九巻であったが後に増補され二〇巻となったという（二一頁注一）。『文献通考』経籍六三に、『黄魯直豫章集』三〇巻『別集』一四巻、『豫章別集』一卷との著録があり、『別集』には「陳氏曰く、皆な集中の遺す所の者なり。（江陵府）承天（禪院）塔記、黄給事（叔父給事）行状、毀壁（序）の如きは、其の顕頭たる者なり。諸孫箝子耕、集めて之れを傳う」と陳振孫の『直齋書錄解題』二〇の記述を引用した按語を付している。但し『別集』一四巻は『外集』一四巻の誤りであろうし、『豫章別集』一卷は、『直齋書錄解題』原文では二〇巻となっている。一方、趙希弁『郡齋讀書志附志』には『豫章先生別集』二〇巻『黄文纂異』一卷とあり「右、豫章先生別集は乃ち前集、外集の未だ載せざる者なり。淳熙壬寅（九年）先生の諸孫箝の編する所なり」と記す。このように南宋後半の著録はいずれも二〇巻とするが、嘉靖本『山谷全書』別集に付す黄箝の豫章別集跋では「合わせて十九巻と為す」と明記しているから、前言が言うように一卷分増補されたとしても可能である。ただ各著録からそれを証明することはできず、単なる巻数の変更に過ぎなかった可能性もある。しかし、慶元五年（一一九九）の「山谷年譜序」には僅自ら「別集二〇巻」とも記しているのも、もし増補が行われ、その際、寒食詩跋を新たに収録し、また張縯の跋が淳熙九年（一一八二）以後、増補版刊行以前に書かれたと考えれば、その時点

で『山谷集』に墓誌銘はあるが詩跋はなく、縯跋の矛盾はなくなる。⁽⁷⁾

二 雅州嚴道の張氏

張縯については後節でまた触れることにし、再び山谷跋が記されたときの経緯に戻る。まずその時期については、既に先行研究がいうように、縯跋で伯祖張浩が山谷に眉の青神で会ったときと述べられているので、黄山谷が戎州から眉州青神に赴いた元符三年（一一〇〇）七月から再び戎州に戻った十一月までとなる。⁽⁸⁾そこでその間の事情を少し詳しく検討してみる。哲宗の親政が始まり新法党が政權に返り咲いた紹聖年間、蘇軾ら旧法党の人物は次々と中央を追われ、或いは罪を得たが、山谷も涪州別駕黔州安置の処分を受け、紹聖二年四月から四川夔州路の黔州に滞在していた。元符元年（一一〇九八）、提舉夔州路常平として赴任してきた張回が、その母同土が姉妹ということで、親嫌の理由から同じ四川の潼川府路戎州安置に変わった。これには、よりましな土地に移すという朝廷の意向があったからだとの説もある（『山谷先生年譜』二七元符元年の項）。やがて元符三年一月に哲宗が崩じ徽宗が即位すると、向太后の方針で党禁が弛められ、山谷も宣義郎監鄂州在城塩税として復歸することになった。微職とはいえ現任に復歸でき正規の俸禄が支給されることを率直に喜んでいる（同上年譜三年五月）。こうして戎州を離れようとした山谷は、長江の増水で三峡を越せないため方向を転じ、眉州

から、ここでは史會と張協の夫人は蘇氏姉妹ということになる。なお『正集』一〇史彦昇送春花という七絶に付けられた『内集詩注』に「彦昇、名は會、青神の人、紹封の子」とあり、青神県の人であることが知られる。この蘇氏夫人が眉山の蘇氏一族であるか否かは分らないが、張協は孫氏か蘇氏を再娶したと理解すべきなのであろうか。また『正集』一七懷安軍金堂県慶善院大悲閣記には、記を依頼した人物として「通直郎知金堂県事張禔」の名を挙げ、かれを「外兄張子安」と呼ぶ。元祐二年の作であり、名の禔が「しめす偏」であること、字が子安で子履、子謙と子の字が共通であること、外兄と称していることを考えれば、張祉や祺と異母兄弟ないし同排行の、いずれにしても嚴道張氏一族であろう。山谷が青神に家姑黃氏を見舞った背景には以上の如き張氏との二重、三重の姻戚関係があった。

三 蜀州江原の張氏

一方、青神県に赴き寒食詩跋を求めた張浩、南宋になりその経緯を跋として認めた張續一族に関してはどうかであろうか。詩卷元有者の張公裕については范純仁『范宣公集』に墓誌銘があり（卷一四承議郎充秘閣校理張君墓誌銘）、また弟公邵には先述の山谷撰墓誌銘がある。これらによれば遠祖は前漢の張良、後漢の張綱と称し、公裕の六代の祖が蜀州江原に移り江原の張氏となったという。公裕の父中理は学行が評価され遺逸推薦に預かるが赴かず、試將作監主簿の

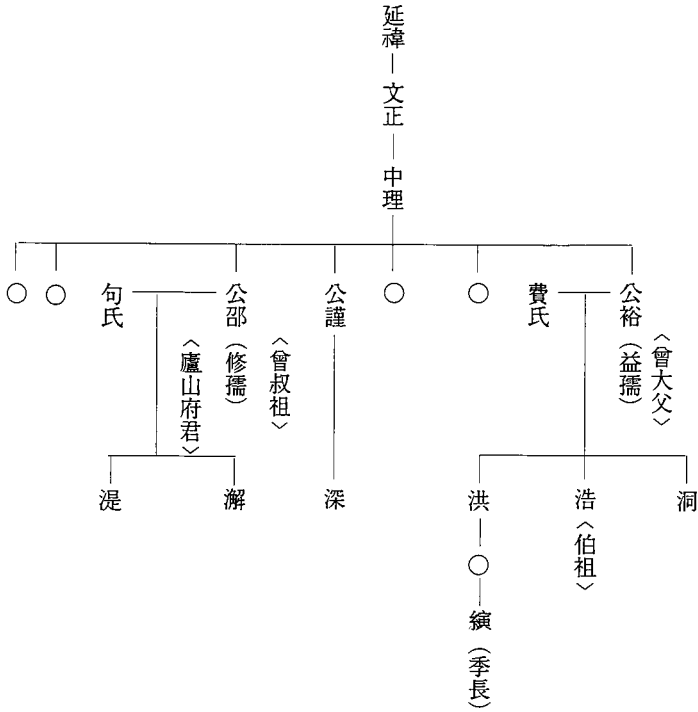
肩書きを授かった。中理には七人の息子があり、五人が官となり長男の公裕が最も著名であるという。七人のうち兩墓誌から名前が分かるのは公裕、公邵の二人であるが、『嘉慶四川通志』六一輿地風俗に引く「費著氏族譜」の張氏の項には、中理の子として元祐五年の五経出身、公謹の名を挙げる。公謹の子深は、隣の成都府雙流県に移り崇寧年間に進士合格、兩宋交替期には張浚の下で潼川路提刑や転運副使、さらに四川都転運使などとして活躍したという。官となった五人の長幼は公裕が長男というほかは不明である。公裕には上から洞、浩、洪の三子があり、張續は浩を伯祖と呼ぶので續の祖父は洪となる。また公邵には澥、湜の息子があった。これらを図示すれば系図2のようになる。

張公裕は、皇祐年間の進士、戎州軍事推官を振り出しに地方官を歴任し、治平三年（一〇六六）、歐陽脩の提言による宰相・參知政事は館職にふさわしい人物を各五名推薦せよとの詔が下ったとき、韓琦の推薦で二〇名の中にその名が入った。山谷の母方の伯父で皇祐元年の進士甲科合格である李常も同じく推薦され、翌年、共に秘閣校理を賜っている⁽⁹⁾。母の喪があけると同知禮院に就き、熙寧三年七月には、親王襲爵問題で執政と争い同僚の知禮院文同らと一官降格の処分を受けた（『長編』二二三）。熙寧五年（一〇七二）、英宗の耐廟をめぐり、天子七廟制のもとでは太廟からはずれる太祖の高祖にあたる僖宗の処置、とくに僖宗を新たに始祖として太廟に入れるか否かをめぐる論争に参加、七廟制を定めた太祖の意向を尊重して始

系図2

蜀州江原の張氏（寒食詩卷所蔵者 公裕以外の兄弟の順は不明）

へへは續跋での呼称。



祖に反対したが入れられなかった（『長編』二四〇十一月戊辰）。後、文彦博の辟召を受けるも養親を理由に地方官を願ひ、嘉州の知事として赴任している。父の服喪後、六〇歳になった公裕は祠禄官を求

め郷里に帰ったが、元豐六年（一〇八三）五月、六十一歳で世を去った。詩、易、春秋、老子、陰府経の注解、家集三〇卷などの著がある（全て佚）。これが官歴の概略である。同じ四川出身者の文同との親しい交流をみれば、蘇軾との近い関係も容易に察しがつくが、「寒食詩卷」真蹟がどういふ事情で公裕の手に渡ったのか、それを示す史料はない。定説のように「寒食詩」の「三たび寒食を過ぐす」を文字通り受けとり、最も早く元豐五年の作としても公裕の死まで一年余り。僅かに東坡の「跋張益孺清浄経後」（孔凡禮撰『蘇軾文集』六六）が、蘇軾と張公裕の繋がりを示すのみである。

子の張浩については殆ど史料がなく、唯一手掛かりとなる情報は、清の光緒二十五年（一八九九）に発見された元符二年の石刻題名記残碑の内容である。『崇慶県志』（民国十五年）藝文一一金石には宋元符題名残刻として次の題記を前段六行、後段六行に移録する。

元符二年上巳前
公尹永康軍導江
一日
縣主簿季宗況前
提刑察院頓公按
梓州鹽亭縣主簿
部過邑同知江源
張浩前□□□□
縣事馬賁新武信
陽縣□□□□□□
軍節度掌書記張
游張氏□

民国十二年（一九二三）に調査したときには、石碑は二つに割られ水門の水止めに使用されて、文面は殆ど磨滅していたが、幸い発見時に記録した者があり、そのときは最後の三行に判読できない文字

があっただけという。『県志』の解釈を要約すると次のようになる。元符二年に提刑司属官（察院は本来、中央の監察御史の役所）頓起が管轄下の県を巡察中、江源県知事馬賁新、梓州路遂寧府武信軍節度掌書記張公尹、成都府路永康軍導江県主簿季宗況、梓州塩亭県主簿張浩、他一名と張氏某に同遊したときの題名記である。碑の出土地を調べると江源鎮の東七里ばかりの所で、版樺院の近くである。従つて碑の出土地は趙清猷の題壁のある張景通の創建した善頌堂の故址と考えられる。一族の張公尹、張浩の案内で參觀したときの題記であらう、と。

この解釈ではば間違いないと思われるので、少し説明を加える。

張景通は公裕の父中理のことで、先に記したように遺逸として推挙されながら赴かず、試將作監主簿に任ぜられ、子の榮達により最後は少師まで累贈された人物である。その存在は中央にも知られ、公裕が養親のために嘉州知事を願ひ四川に帰るとき司馬光、范鎮らは中理に詩巻を贈つた。司馬光『司馬文正公伝家集』六に収録されたその詩題は「寄題張著作（中理）善頌堂（嘉州公裕學士之父）」とあり、公裕はそれらの詩巻を石に刻むため文同に序を求めたことも先に述べた。文同には、また江源張景通善頌堂と題する七律がある。⁽¹²⁾ いずれの詩も遺賢に相応しい中理の姿と息子たちの相次ぐ官界入りの誉れ、善頌堂の景観を詠っている。とすれば文同の詩の原注「雲蓋、堂下の石銘」とは、善頌堂に建てられた詩巻石刻を指しているとも解釈できる。さらに趙抃にも「過嶺回寄張景通先生示邑下同人」

という詩が残されている。⁽¹³⁾ 趙抃には蘇軾の撰した神道碑があり、仁宗景祐元年の進士、殿中侍御史として宰相らをも厳しく弾劾し鉄面御史と呼ばれ、神宗朝には參知政事まで務めたが、王安石の新法に反対し中央を離れ、元豊七年、七十七歳で世を去つた。清猷はその謚である。抃は二度にわたり成都府知事を務めるなど蜀に関係が深かった。先の詩はそれとは別に、まだ官歴の浅いころ歴任した地方官のうち、蜀州江源県知事を離任したときのものである。詩の内容から推すと、文行ありとして張中理を官に推薦した人物は、この趙抃その人ということになる。中理の善頌堂に趙抃の題壁が書かれた理由は、両者のこの親しい関係にあつたのである。「長厚清脩」を称えられた張清猷の題壁と司馬光・范鎮らの詩巻石刻の存在、仁宗飛白書の所蔵など、当時の善頌堂は四川の文人官僚たちが同遊する格好の名所となつていた。このとき一行に同道した張公尹は、その名前からみて『県志』のいうように公祐、公邵の兄弟か或いは同排行の一人とも考えられる。公裕の息子張浩は、翌年、寒食詩など東坡三詩を携え、跋文を依頼しに眉州青神県の黃山谷を訪ねたのである。青神県に姑を見舞つた山谷は、流配を許された直後でもあり、久しぶりに鬱屈の気が解けたのであろうか、この時期の詩文はいずれものびやかな表情を漂わせている。『全集』五に収める「借景亭（并序元符三年戎州作）」はその一つだが、序に「青神県尉厅、城頭の旧屋を葺して借景亭を作り、史家園の水竹を下瞰す。終日寂然として、了に人迹無く、又大木緑陰の間に当たる。戯れに長句を作り、信

孺明府、介卿少府に奉呈す」とあり、詩は張祉（介卿）と信孺という人物に奉呈されている。少府は県尉のことであり、明府は県知事を指す。『全集』は、この信孺を閬州知事魚仲修の後任者となる程信孺としている。⁽¹⁴⁾ 信孺はまた八月末に山谷のために酒宴を設けたことも知られる（『全集』別集二 游中巖行記二）。しかし詩本文には「青

神県中、両張を得、民の財力（物）を愛し、惟だ傷わんことを恐るのみ。二公、身ら民を安んじ乃ち楽しむ。…」とあり、二公を知県と県尉の両張すなわち張信孺と張介卿というようにもみえる。字に「孺」を含む人物は、『全集』中、成孺、徳孺など外にも多くみられることもあり確定しにくい、もし張信孺であれば張公裕、公邵の字が益孺、修孺であるから、官を得た五人の兄弟の一人ということになり、山谷来訪の知らせは知事自らによりいち早く江原に伝わったことであろう。それはともかく、青神県で張浩以外の江原張氏が山谷に同道していたことを示す史料がある。「別集」二の先掲「游中巖行記」の三に「元符庚辰（三年）季秋の丁丑（九月十四日）、尉の張祉介卿及び其の兄櫛（櫛）子謙、姪協大同、甥宋正臣端弼、予を邀え、茗を攜えて来たり玉泉を煮る。同に来る者、楊湛君貺、張灝持遠。自頃屢しば来たるも、常に晦冥に苦しむ。是の日天地開廓、極目千里。黄某魯直」とある張灝は、亡き盧山府公公邵の子である。中巖は青神県の青衣水の北に位置する名勝三巖の一つ。山谷は滞在中、しばしば訪れたらしく同游記を幾つも残している。青神県滞在中、山谷は多くの知友に取り囲まれていたが、その中心に姻戚の雅州巖

道と旧知の蜀州江原、両張氏一族の姿があり、こうしたなごやかな空気と、配流を釈かれた解放感のなか、題跋としては異例の東坡の本詩に並ぶ大字による山谷寒食詩巻跋が生まれたのである。

四 南宋の善頌堂

山谷跋誕生の経緯を記した張績、字は季長について、同時代のまとまった伝記史料はなく、民国十五年と一九九一年編纂の両『崇慶県志』の該当記事が詳しい。とくに後者はもつとも詳細であるが、残念ながら典拠の記載がない。それらを参照しつつ行論に必要なその経歴を抜きだすと、生まれは紹興の初め、隆興元年（一一六三）の進士。乾道八年（一一七二）、四川宣撫使王炎の幕下に入り利州路興元府南鄭に赴任。このとき陸游と同僚となり、以後二人は張績が世を去るまで三十五年以上の交友を続ける。翌年、王炎の辞任にともない、四川を離れて入京し秘書省正字に遷るが、淳熙元年（一一七四）から四年まで父の服喪で帰郷、五年以降は各地に任官した。その中には淳熙十四年前後の利州路提刑、知遂寧府、中央に戻った紹熙年間の大興寺少卿、再び外任の知漢州などが確認できる。⁽¹⁶⁾ 紹熙二年以後、「天資傾險、貪得好進」「賦性極鄙、所至姦賊」などとす

る三回の弾劾による官観差遣の記事が目につくが、党争のなかのこともでありその実情は分からない。⁽¹⁷⁾ 嘉泰元年（一二〇一）以降は故郷江原に戻り、著作に専念し、開禧三年（一二〇七）に没した。著

に『中庸辨擇』『陶靖節年譜』など数百卷があつたといふ。⁽¹⁸⁾

「寒食詩卷」との関連でもっとも注目すべきは、丁憂で家居していた張績のもとに、淳熙四年、范成大が訪れたことである。淳熙元年十二月、四川制置使に任命された知靜江府广西經略安撫使范成達は、二年正月に桂林を發ち、六月に成都に到着、以来その任にあつた。

しかし淳熙四年、病を理由に祠禄を願つて許され、五月二十九日に成都を離れている。途中、永康軍を廻り青城山をへて六月九日、江原県に至つた。このときのことを『呉船録』は「丁丑、三十里にして早くに江原縣に頓る。前館職張績季長招きて其の曾祖作る所の善頌堂に至る。季長の祖、司馬溫公、范太史と同朝にて相善し。新法を論じ合わずして帰る。二公、前頌堂詩を作り以つて之れを送り、壽を其の親に帰せしむ。詩卷皆な存す。壁に趙清獻公宰邑の時の題字あり。季長の族祖浩の藏せる仁宗飛白の書、山谷跋する所は、其の末句『誉天地之高厚、賛日月之光華、臣知其不能也』と。今の集中は『臣自知其不能也』に作る。自の字、蓋し後來の増す所、語意方めて全きなり。山谷自ら洪州分寧縣雙井里前史官臣黃庭堅と稱す。蓋し戎州に謫さるる時に跋する所なり」と記す。曾祖（中理）は高祖、祖（公裕）は曾祖の間違いであるが、善頌堂はこのときも健在であり、張績はここで所藏の司馬光らの詩の原蹟、山谷跋の仁宗御書を范成大に開陳したのである。成大は『山谷集』に収載されている跋文との違いを指摘し、その肩書きから書かれた時期を推測している。なおこの肩書きは、『豫章黃先生文集』をはじめ諸文集の記に

はみえない。さらに范成大はこのとき「江原縣張季長正字家善頌堂」の詩を作っているが、その詩題の原注に「季長、盡く先世の藏する所の圖書を出す。壁に趙清獻公、令爲りし時の題名有り。是の日、新米を食し、坐中皆な贊め喜ぶ。夏の初め嘗て大旱なればなり」ととくに記す。⁽¹⁹⁾「盡く」が文字通りであるかは別にしても、このとき「寒食詩卷」が出されていれば、必ずや記録にとどめている筈である。それが無いということは、何かの理由で張績が出さなかつたのか、或いは淳熙四年の段階ではまだ所藏を知らなかつたのかのどちらかであろう。

同じことは陸游の場合についてもいえる。先述のように三十五年以上にわたる張績との交友は、互いに遣り取りし、或いは蜀と山陰と遠く離れながら相手を思う三〇首以上の詩を『劍南詩藁』に残したことで知られ、『渭南文集』四一の祭張季長大卿文は、その二人が「異体同心、有善相勉」と生涯切磋琢磨する關係であつたことを述べている。陸游は江原県の治所である蜀州通判の二度の就任を含め乾道六年（一一七〇）から淳熙五年（一一七八）まで四川に滞在した。その間、何度か江原に赴いているが、「宿江原縣東十里張氏亭子未明而起」の題詩があることをみれば（『劍南詩藁』一六）、陸游も善頌堂を訪れたことは確かである。⁽²⁰⁾その陸游に寒食詩卷に関する記述は一切残されていない。周知のように陸游は、成都府知事であつた汪應辰が、乾道四年に蘇軾の書を刻して作成した西樓帖三〇巻のうち、優品を選び東坡書髓一〇巻として再編纂しているほど軾の書

への関心は高い。にもかかわらず寒食詩巻への沈黙は、張績がそれを示さず、陸游にも鑑賞する機会がなかったからなのであろう。

先に、績跋は淳熙九年以降に書かれた可能性があると述べた。范成大、陸游二人の言動も、それを支持しているかのようである。

おわりに

東坡・山谷の北宋二大家が並び競う空前絶後の書巻にもかかわらず、張績のあとに宋人の跋はなく、当然、あまた刊行された宋人題跋類の書物にも『山谷題跋』を除き寒食詩は収載されない。わずかに詩巻の荆湖南路転運使印が爾後の宋人鑑賞の痕跡を残すのみである。

蘇軾の政治的位置は、政局に連動して浮沈を繰り返した。同時に、根強い人気があるその書は、時の政権からみれば本人同様あるいはそれ以上に扱いに気を使う存在であった。とくに徽宗朝は、東坡の書や書物の所有が禁止されたのみならず、版木は焚かれ、その石刻も毀れた。しかしそれにもかかわらず一般の東坡愛好者は冷めず、書や書物はひそかに所有され読み続けられた。のみならず実は朝廷中枢においても建前上の禁令の陰で、東坡の書の収集熱は盛んであったのである。⁽²⁾ そのため書の所有者は、国禁を犯すことと権力中枢によって書を巻き上げられる二重の危険に曝されていた。この危険は、乾道六年（一一七〇）孝宗が蘇軾に文忠の諡を贈り、乾道九

年に曾孫嶠が奉った文集に御製の序を賜ったことで、一応なくなつたといえる。しかし当時の人にとり、政権交代にともなう評価の逆転の予想が完全に払拭できたかどうかは疑わしい。張績にそうした心理がはたらいていたか分かるはずもないが、寒食詩巻の所蔵について、善頌堂を訪れた范成大、陸游も目にするのがなかったほど慎重であったことは確かであろう。

王朝の興亡を含めた政治の変動に加え、自然的、人為的災害も伝来の作品が失われる大きな要因であることはいうまでもない。現存寒食詩巻はその上下が焦げて、英仏軍による円明園焼き討ちの跡を残し、さらに関東大震災、東京大空襲にも遭遇している。この作品が、今ここにあるということは、単なる偶然の結果ではなく、その作品に価値を認め、場合によっては生命を賭けても守り後世に伝えようという人々の営々と続く努力の集積として初めて可能なのである。要するに伝世作品は、後世の人々のそれを残そうという意思の産物であり、「在る」こと自体に明確な価値判断が含まれている。この点が、偶然発見された出土作品との大きな違いであり、恐らく事情は、文献史学が扱う伝世史料も同じであり、史料の存在そのものが歴史であるともいえる。——中国文化史とは何かと問われれば、黙ってこの寒食詩巻をさし出せばよい。

注

(1) 石川九楊『書の宇宙』一四 文人の書・北宋三大家 一八頁（二玄社一九

九八。

- (2) 同氏『中国書史』三三―三四頁(京都大学学術出版会一九九六)。以下の同氏の言葉はこの書に依る。但しこれ以外の東坡書蹟についての氏の評価は厳しい。例えば「蘇軾の書で評価しうるのは、顔真卿の書の垂流にすぎない宸奎閣碑、あるいは王羲之の寄りの尺牘(たとえば致長官董侯閣下)などとは次元を違えた、新しい質をもっている黄州寒食詩ただひとつに限られるといっても過言ではない」(前注書八頁)など。

- (3) 注(2) 同書には「『曰く言い難いところそのものを何とか言葉に換えようとする営為がなければ、書の美の存在を証明することはできず…』(五頁)、「蘇軾の書は難しい。その深々とした魅力にもかかわらず、ここがこうだ」と指摘しえない深みがある」(三四頁)や「『黄州寒食詩卷』には、書固有の表現のもつこき、一度限りの臨場のこわさ、危険性を含めて、書固有の表現のすべてがここに隠されていると言っても言い過ぎではない」(二二五頁)とあり、おそらく氏の研究者と実作者二つの立場を前提とした、粘り強い思索の結果、導き出された見解であろう。

- (4) 顔魯公は顔真卿、楊少師が楊凝式。従来、李西臺は李建中と理解されてきたが、近年、李西臺は李邕であるという説が出され論争となった。『故宮文物月刊』五〇期(一九八七)、六〇期(一九八八)など。衣若芬「赤壁漫遊與西園雅集―蘇軾研究論集」(線装書局二〇〇二)一八四頁以降参照。

- なお石守謙「無佛処称尊―談黄庭堅跋寒食帖的心理」(『故宮文物月刊』八五期一九九〇)は、山谷跋の最後の文「無佛称尊」の佛は蘇軾、尊は自分の書と解し、山谷の並々ならぬ自負と蘇軾への対抗心を読み取ろうとする。蘇軾、黄庭堅両人の謫居とその心理、書との関係などを論じて興味深い。

- (5) 地方官の査察を命じられた張綱が、「豺狼路に當る。安んぞ狐狸を問わんと述べ、朝廷要路の大悪を除くことが先であると、車輪を洛陽都亭に埋めて出発しなかった故事」(『後漢書』五六張綱伝)。

- (6) 中田勇次郎『碑帖題跋記』黄庭堅一四三黄州寒食詩卷跋は「…この詩卷の宋の張續跋によると、その伯祖にあたる張公裕が眉州の青神(四川)で黄

庭堅に会見したとき、…」(同氏著作集一〇所収二玄社一九八七)とするが、伯祖は公裕の子である浩としなければならない。なお小論では、二玄社刊「蘇軾 黄州寒食詩」卷子により題跋などを検討した。

- (7) いささか瑣末になるが、この可能性が全くないわけではないことを述べる。『全集』付録にある黄魯「豫章別集跋」(嘉靖本卷末)には「散亡を博く求め、八百六十八首を得たり」としてその内訳を「詩七十六、銘・贊・頌六十九、序・説・記四十二、律賦・策問五、箋注二、書・表・奏狀・啓二十八、雜著六十五、疏・詞・文三十四、行狀・墓銘・表二十四、題跋二百三、書簡三二〇、合して一九巻と為す」と記す。ところが日本の内閣文庫蔵嘉靖本には異なる数字を載せる。内閣文庫には毛利家と林家旧蔵の二本の嘉靖六年序をもつ明版『山谷全書』が所蔵されており収録する別集の位置が異なるが同じ版である。いずれも後刷りでとくに林家本はかなり刷りが悪い。その別集跋は『全集』付録と同じく淳熙壬寅(九年)の紀年を記しながら(厳密には『全集』の二月二日旦が内閣本では二月旦となっている)、収録する記事の総数と内訳に異同がある。まず総数では八百八十一首と十三の増があり、内訳でも増減の違いがある。行狀・墓銘・表の部分が同じ二十四(但し原文は一十四。毛利家・林家二本とも内訳の数を足しても総数とならないが、内閣文庫蔵萬曆四十二年刊の『重刻黄文節山谷先生文集』別集の跋は毛利・林旧蔵嘉靖本跋と同じで且つ内訳の合計は総数に等しいので、数字はこちらを用いる)に対し題跋は百九十九で四の減である。しかも別集の巻数は二〇とあり、『全集』の引く嘉靖本跋と異なる。なぜ同じ嘉靖本で違いがあるのか詳細は分らないが、魯が淳熙九年以降、内容の改定を続けていた可能性は否定できない。因みに清乾隆刊の緝香堂本の別集は一九巻であるが、付する魯跋は毛利・林家本と同じで二〇巻とする。なお江兆申氏は張續跋を一一八〇(淳熙七)年頃書かれたというが、とくに根拠は示されていない。また江氏のいう湖南跋の一九一七(大正六)年は、湖南が北京でこの詩卷を見た年であり、跋は先述のように一九二四年に書かれたものである(『故宮文物月刊』八五期一九九〇)。

(8) 中田勇次郎『黄庭堅』(二)玄社一九九四)年譜一七七頁など。

(9) 『続資治通鑑長編』二〇八治平三年一〇月甲午、同二〇九治平四年閏三月丙午。『長編』二〇九は秘閣校勘とする。秘閣校勘は、南宋の理宗紹定元年(一二三〇)に置かれた選人資序、無品の職事官である(龔延明『宋代官制辞典』二四二頁)が、ここでは館職任命であり、同じく秘閣校勘となったとする李常について『長編』二二〇熙寧三年四月壬午には「右正言秘閣校理李常、落職し太常博士・通判滑州と為す」とあるので、墓誌の記述に従い秘閣校理とする。

(10) 文同『丹淵集』二六送張学士知嘉州序は、熙寧八年上元の作で、同六年秋友人の張公裕が知嘉州として四川に赴くに際し、友人知友が餞別の詩を送った。公裕は、知興元府にある私(文同)のもとにそれらの詩を右に刻むので序が欲しいと依頼してきた、とあり、交友の一端が知られる。

(11) 詩は「玉壘老先生、逍遙樂太平、門闌百客盛、冠蓋一鄉榮、国族招邀近、堂皇指顧成、江山對平遠、図史散縱横、止水中心適、秋毫外物輕、鯉庭新露冕、閭巷不須驚」。

(12) 『丹淵集』一三庭前雲蓋碧嶠嵒、堂上先生雪滿髯、説葉客來聊下榻、謁廟僧去便垂簾、種時法好花難謝、買処錢多石易添、子舍光榮身壯健、只将香火事華嚴。(雲蓋堂下石銘)なお文同は、張中理の死に際して「張中允先生挽詩」三首を捧げており、其の三でも「庭前雲蓋石」と詠んでいる(同二〇)。

(13) 『清獻集』三「二年官役愧能名、賢得斯人幸合并、幾度孝廉交郡辟、一生文行出鄉評、君廬早水江頭遠、我馬青泥嶺頂行、西首胡爲書以贈、欲持同邑寄諸生」。なお巻五には、題江原張著作善頌堂と題する七律がある。

(14) 『続集』五答王親復の第四狀に「頓首、承魚仲修待程信濡來、遂解印、便欲作整暇堂意記去。乍到青神、終日接応人事、比夜則嗒然就臥、終無意可作。…」とあるによる。

(15) 青神県中得向張、愛民財力(物)惟恐傷。二公身安民乃樂、新葺城頭五
(一六) 月涼。竹鋪不洩吳綾機、東西開軒蔭清颺。当官借景未傷民、恰似鑿池

取名月。

(16) 『宋会要』職官四七一、六二一二七、七三一六、選舉二一四、食貨六八八四など。

(17) 『宋会要』黜降官七三六。同七四一一の嘉泰元年八月二十三日、知潼川府の任命取り消しの場合は、「理作自陳」という自らの希望で宮觀差遣を与えるという形式をとり、実質的には処罰の意味をゆるめた措置であった。

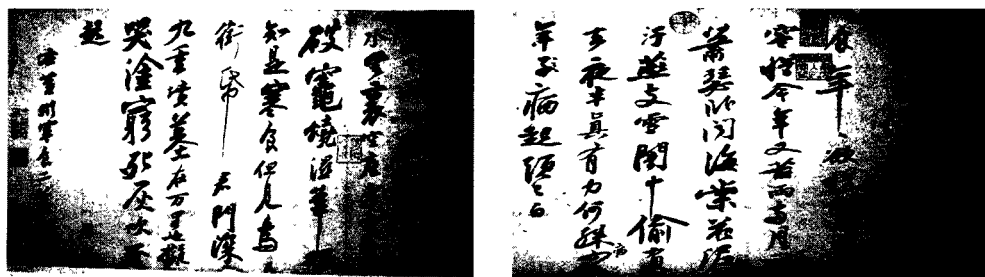
(18) 陸游『劍南詩藁』七三哭季長二首の原注に「季長晩著書數百卷」とある。現在はずべて佚。

(19) 『石湖居士詩集』一八江源縣張季長正字家善頌堂へ季長盡出先世所藏圖書壁有趙清獻公爲令時題名。是日食新米、坐中皆贊喜、夏初嘗大旱也。我窮江源來、名勝頗追逐。薰風秀沃野、在處得寄囑。頌堂有佳士、文字照籙竹。圖書抱世守、古錦韜玉軸。黃金不滿囊、故園有喬木。遂巡酒如灑、霍霍具水陸。田頭新穀升、一飯香滿屋。回思閔雨時、敢望遽炊玉。摩挲壁間題、明府遂州牧。山高江水長、百世照尸祝。我來坐琴壇へ琴壇在成都西園、清獻公彈琴宴坐處、觀汗魂前躅。空餘煙霞窟、未許是公獨。請歌青城遊、或附耆舊錄」

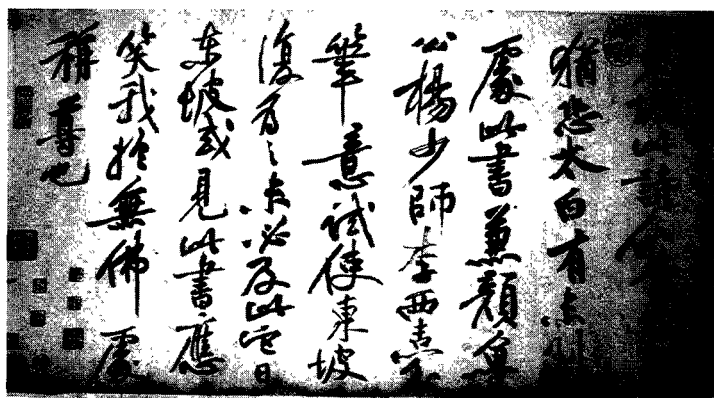
(20) 前節で紹介した、恐らく善頌堂に建てられていた頓起ら題名碑の出土地が江原鎮の東七里ほどの所という伝承は、陸游が宿をとった江源県の東十里にある張氏の亭子が善頌堂であることを示す。

(21) 近藤一成『西園雅集考—宋代文人伝説の誕生—』(『続』『史観』二四一九九九)。

(補注) 収蔵家の印については、佐野光一「黄州寒食詩卷の伝来」(『中国書法ガイド蘇軾集』二玄社一九八八)が詳しく解説している。併せて参照されたい。(群馬大学石田肇氏のご教示による)



我、黃州に來たりてより已に
三たびの寒食を過す。年々
春を惜しまんと欲すれども、
春去つて惜しむを容さず。今
年また雨に苦しむ。両月、秋、
蕭瑟たり。臥して聞く海棠の
花、泥は燕支の雪を汚すを。
閨中儉かに負いて去る。夜半、
真に力有り。何ぞ殊ならんや、
病める少年の、病より起てば
頭已に白きに。
春江、戸に入らんと欲し、雨
勢來たりて已まず。小屋、漁
舟の如く、濛々たり水雲の裏。
空庖に寒菜を煮、破竈に湿葦
を焼く。那ぞ知らん是れ寒食、
但だ見る烏の啼を銜むを。君
門九重に深く、墳墓万里に在
り。也た塗窮に哭せんと擬す
るも、死灰吹けども起たず。
右黃州寒食二首



東坡の此の詩、李太白に似
たるも、猶お恐らくは太白
も未だ到らざる処あらん。
此の書、顔魯公、楊少師、
李西臺の筆意を兼ね。試み
に東坡をして復たこれを為
らしめんも、未だ必ずしもこ
れに及ばざらん。它日、
東坡あるいは此の書を見れ
ば、応に我の佛無き処にお
いて尊を称するを笑うべし。